

秋田出身者の絆を深めたいとウェブサイトを「あきたのかお」(<http://www.akita-kaeo.com>)を立ち上げたのは昨年六月のことです。首都圏を中心に活躍されている秋田出身者のインタビューをご紹介しながら、故郷を介してつながるタテヨコのネットワークを「Weak Ties」として構築したいと考えてきました。

ポラリス Polaris

「Weak Ties」とは米国の社会学者グラノヴェッターが提唱した転職についての考え方、自分とは異なる情報を持つている人とのゆるやかなつながりが、転職を成功させる条件として重要であるというものです。しかし転職に限らず、生きることにそのものに対して「Weak Ties」の重要性は増しているように感じます。

ひとくちに「情報」と言いますが、「情」と「報」ではその文字の意味するところが実は大きく異なっています。「報」とは、「その気になれば、誰でも、どこからでも、いつでも入手できる公開された定量的な情報のこと」であり、一方「情」とは「face to face communication」から得られ

るニュースや裏事情など、人が介在することによってはじめて発見され、入手可能になる定性的な情報です。何かの問題解決を図るときには、「報」だけではなく「情」の部分がより重要になります。「Weak Ties」の重要性は、問題解決の心理的な拠りどころとなる情の大切さを物語っているのです。

大学進学と同時に秋田を離れ、そのまま東京で就職する道を選択した私は、都会生活



「秋田」と「福祉」に希望を見つけて

金谷 さおり (平成10年生)

・LLP「秋田の顔」プロジェクト代表
・知的障害者更正施設職員

のなかで同郷の方々、とりわけ同窓生の先輩たちには大変お世話になり、「Weak Ties」の大切さを実感してきました。このつながりを、高校の卒を超えより多くの秋田出身者で共有し合うための場所として「あきたのかお」を立ち上げました。

現在は毎月十日に更新されるインタビューのほか、話題の秋田情報やイベントのお知らせ、秋田にゆかりのある

方々からの寄稿、連載の掲載も行っています。ようやくたくさんの方々を知っていただけのようになり、一カ月あたりのアクセス数は七万件を超えるようになりました。最近では国内のみならず海外にいらっしゃる秋田出身の方からも「故郷の情報をありがたう」とメールをいただいたり、記事に取り上げた食品や工芸品などの名産品を実際に多くの方が手にとってコメントをくださったり、お知らせした

イベントに足を運んでくださる方が増えてきたりと、活発な動きが生じていることに手ごたえも感じています。また、活動を通して出会った若手世代と「あきた希望計画」と銘打った雇用創出プロジェクトを立ち上げるなど、活動の幅も広がってきました。

日々、お伝えしたい素晴らしい秋田が、愛する秋田が、いつも私の全身から溢れ出し、そんな感覚のなかで生きてい

ます。しかしながら、本業を持ちながらの社会活動であり、信する時間もとれず歯がゆく思うことも少なくはありません。私の本業は「福祉」で、普段は東京都内にある知的障害者更生施設で勤務をしています。重度、最重度の知的障害者と向き合う毎日、人の命の尊厳や、人の心の美しさ、障害のある人もない人も共にフラットな感覚で自然体で生きることを大切にするなどを学ぶことができる、人間としての成長の日々でもあります。そしてこの福祉の視点こそが、自殺率、婚姻率、出生率、人口減少率が軒並全国ワースト一位である秋田県において、とても大切であり求められているものであると考えます。

いずれば福祉を通じて、秋田に貢献できる人間となり、ふるさとへ帰りたい。「秋田」と「福祉」に生きると決意した私にとり、本業も社会活動としての「あきたのかお」も、どちらも欠かすことのできない大切なライフワークです。支えてくださる方々にたくさん「ありがとう」を伝え続けていくためにも、今後も地道な活動を続けてまいります。

天上天下

本紙が九〇号を迎えた。創刊は、蓼沼銀次郎会長当時の昭和五〇年である。全六ページから成る第一面のトップに、「機関紙発行を期に高まる連帯感」と題した蓼沼会長の発刊の辞が載っている。その後次第に頁数が増し、紙面の大きさにも変化があつて、一部カラーも取り入れた現在のスタイルになったのは、平成一八年の第七八号からであった。▼「九〇」は「九」と「〇」の組合わせである。中国では、奇数は陽のめでたい数字で、偶数はその逆である。「九」は奇数の中でも最大の数字で、それが二つ重なる九月九日は「重陽の節句」として祝われている。▼一方、「〇」という概念はインドで確立されたものだという。ゼロの発見によって、人類の数学的認識力は飛躍的に進歩したとも指摘されている。▼近年、アメリカの影響が低下が目につくようになり、反比例する形で中国やインドが躍進ぶりを見せている、今後はこの二カ国が世界の主役に躍り出ていくのであろうか。いずれにせよ、本紙は百号という節目に向かってさらなる充実発展を期していくのみである。